

【クセナキスとル・コルビュジエ】

三善晃の作品

独奏マリンバのための組曲《会話》は、三善晃にとって初のマリンバ作品だった。1962年、マリンバ奏者・安倍圭子の委嘱により作曲され、今やマリンバ奏者のスタンダード曲といっても過言ではない。

組曲は、子供のいる家庭の、何気ない「会話」を活写している。いたわりの気持ちに満ちた「やさしいお話」。いいことがあった日は、何度も「よかったね」を繰り返す「よかったね、あれ…を何回も」。悔しいことがあった日は、思わず早口になって、伝えたい気持ちが募る「いつまでもくやしい」。せっかく話しているのに、こちらの話を聞いているのか、いないのか「生返事ばかり」。それぞれが言いたいことを言って、賑やかだが内容は食い違う「つじつまのあわない報告」——以上の5曲からなる。

「トルスⅢ」も、安倍圭子の委嘱により1968年に作曲された。「トルス」（上半身の「胸像：トルソー」の意）は、断続的に書き継がれた楽器や編成が異なる作品群で、Ⅰ～Ⅴまでである。独奏マリンバのための「トルスⅢ」は、2つのテーマを提示する「These」、「Chant」（唄）、テーマを解説する「Commentaire」、テーマを総合する「Synthese」の4つの部分から構成される。

独奏マリンバのための「リップル」は、1999年に長野県岡谷市で開催された「第2回世界マリンバ・コンクール」第2次予選の課題曲として書かれた。「リップル」とはさざ波のことで、地球上のどんな小さなさざ波でさえ、地中深くのマグマと関係があり、その巨大なマグマの多様な表現の一つとして、さざ波の微かな動きを注視したいという、作曲者の思いが込められている。

クセナキス：ルボン

現代音楽において孤高の存在感を示したヤニス・クセナキスは、ルーマニア生まれのギリシャ系フランス人。アテネ工科大学で建築と数学を学び、反ナチスのレジスタンス活動を経て、建築家ル・コルビュジエのアシスタントとして働きながら、パリ音楽院で作曲を学んだ。作曲に数学理論を応用する手法は、師メシアンの助言により発案したものだった。

「ルボン」は1988年に作曲された、ソロ打楽器のための作品。「a.」と「b.」という2つのパートから構成され、2つはアタッカで中断なく演奏される（演奏する順番の指定はない）。楽器構成は、「a.」がボンゴ2、タムタム3、バス・ドラム2。「b.」がボンゴ2、トゥンバ（コンガ）、タムタム、バス・ドラム、ウッドブロック5のセット。カオスでありながら、緻密に計算・設計されており、プリミティブな響きを持ちながら、洗練されている。加藤訓子は本作に長年取り組んでおり、それだけ魅力の尽きない作品と言えるだろう。